

## 全体討議

伊藤—— それでは後半のディスカッションを始めさせていただきます。先生方のお話を伺って、私の方でいくつかの論点、問われているであろう論点をまとめました。

一点目は、学祖研究というのは、明治あるいは大正の人々の考え方をもう一度見直すといういとなみでもあるわけですが、当時と現代とでは、時代背景を含め、異なる点も多くあるわけですね。そのように異なるものを、どのようにつなぎながら研究を進めるべきか、という問題です。先ほど片桐先生は、今の時代に学祖の考えをいかに活かしていくかが大事であるということを強調していらつしやいましたし、竹村先生は、円了の言葉を今の言葉に言い換える必要性をおっしゃっていたわけですが、当時と現代とでは当然時代や社会背景が違い、目指していたことも違うわけですね。たとえば山田顕義の言っていた「国体」という言葉、あるいは下田歌子や成瀬仁蔵の説いた「良妻賢母」「賢母良妻」ということなどが、今の時代にはやはりそのままは使えない。そういうものを、いかに現代の私たちが研究し、そして活かしていくことができるのか。そういうことが、まず大きな問題としてあるのかなという気がいたします。

湯浅先生宛てのご質問にも、「今の時代に役に立たなかったら研究する意味がないということをおっしゃったと思いますが、下田歌子研究が、現在の学校教育にどのように役立てられているのか、あるいはその研究によって、学校教育が抱えている問題をどのように解決していくのかを、具体的なかたちで教えていただきたい」というものがありました。そういった、学祖研究を現代にいかにか活かしていくか、という点がまず一点目です。

それから二点目として、学内での学祖評価を一元化していくことの難しさということがあるかと思えます。たとえば先ほど、成瀬仁蔵が「崇拜者」と言われるような人たちを中心に、他大学などでは考えられないほどに大事にされているというようなことも伺いましたが、そこでは建学の精神とその人となりとが重ねられているからこそ、崇拜といってもいいような扱い方、対し方がされているのでしょうか、建学の精神や学祖の事蹟というこ

とと、学祖の人となりということには、必ずしも一致しないところももしかしたらあるのではないかとあります。あるいは、日本大学、日本女子大学の例などでは、複数の協力者によつてはじめて大学ができていたという面があるわけです。それを、たとえば日本大学では、山田顕義という人を学祖・創立者として決めました、としているわけですが、そういうことも含めて、学祖・創立者という人と、建学の精神というものを、どれだけ重ねて考えられるのか、という問題があるかと思っています。

また、研究者によつて学祖に対する評価が当然さまざまに違つてくるわけですが、さまざまな研究者がそれぞれの視点から捉えているものを、大学の統一見解としてどのように出していくべきなのか、あるいは、出していかなくてもいいのか、という問題もあるかと思っています。

それから三点目は、そのこととも関係しますが、自校教育についてです。これに関しては、学校としてのコンセンサスあるいは学校全体の協力体制というものが程度は必要になるわけで、その際にどのような注意や配慮というものが必要なのか。あるいはその自校教育は、今いろいろなかたちでそれぞれの大学が行っているということを伺いましたけれども、それに対して学生さんからどのような反応があるのか。あるいは、どのような効果が見られるのか、あるいは見られないのか、といったことも伺いたい

と思います。

それから四点目ですが、これはすべてをまとめてと言いますか、今後の私立大学のあり方についてのご意見をあらためて伺いたいと思います。私学というのは、創設時には、官学とは異なる教育、国立ではできない教育という点にある意味を持つて、気概を持つて始めた学校がほとんどなわけですから、現在、現実問題として、私学はどのような位置を持てているのか、というようなことについてです。まさに学祖研究、学祖の精神に立ち返ることについての意義が問われるわけですが、そういうことについても議論できればと思います。

今ざつと四点ほど挙げましたが、すべて重なっているといえは重なっている問題でもありますので、先生方にもし最初に何かご意見や、あるいは先ほどのお話で言い残したことなどあれば、お伺いしたいと思います。

では、最初に湯浅先生、先ほどのご質問、「今に役に立たなかつたら研究する意味がないということをおっしゃっていましたが、では下田歌子研究を現在の学校教育にどのように役立てられているのか、その研究によつて、学校教育の問題をどのように解決していきたいと思っているのかを、具体的なかたちで教えていただきたい」ということについては、いかがでしょうか。

湯浅——少し補足になりますが、研究所が昨年度設置された経緯、どういう授業を行っているか、実際具体的に何をしたかという経緯を申し上げる中で、二〇〇八年からの動きを紹介しました。まずは学生が入学してきた時にどういう教育をするかということを一先いたしました。やはりよりきめ細かい教育をする、高校の勉強ではない、しかも実践女子大学という私立大学に入学しているということがありますから、なるべく躓かないようにする、あるいは躓きを早く修正するようにきめ細かく少人数の教育をするということ、いわゆる初年次教育を一新した中で、創立者のことを伝えるという点を入れ込みたかったということです。先ほど片桐先生が、日本女子大学に赴任された時、成瀬成瀬とこんなに学祖のことを話す大学があるのかということでしたが、それはとても大事なことで、そういう大学にしたいと私は思っていました。それまではそうでなく、入学式と卒業式で一回ずつだったのですが、授業として創立者のことを伝えなければならぬと思ったわけです。カリキュラムとして組む中でも、まず学祖について伝えなければいけない。疑問を持ったり調べたりということもそこから始まるのであって、そういう改革を行いました。しかもプログラムを設定しました。すると、さらにもっと下田について研究しなければならないということから、プロジェクト研究を起こし、私一人でやったわけではありませんが、仲間や教授

会の総意と理事会の認可を得て、昨年度から研究所が立ち上がったということも、単に歴史的な研究ではなくて、下田の目指したことをいかに学生にあるいは内外に社会に伝えていくかということでした。

具体的にそれをどのようにしていくかですが、たとえば下田の目指したものを伝えるだけではなくて、それを普段のさまざまなカリキュラムの中で、学部が違っても共通教育として、末端まで血脈が通うように反映できるかというのは難しい問題です。下田歌子は一度も学校教育機関で学んだことはないですが、大変な文章家でしたし、語学でもできました。和歌・俳句を詠み、国文に通じ、儒学者の娘として漢籍も読み解くこともできた。和漢洋三才に秀でていたし、それを背景に文章を書いていました。学校教育は受けていないが、逆に言えば、御本人が生涯みずから学び続けていた人です。それは生涯教育に通じるわけで、たとえばそういう姿勢を伝えることも大切です。大学で学びが終わるわけではないですから、生涯学び続ける力をつけさせる時に、そういう人物像や生き方を伝えることも具体的な教育の一つだと言えます。あるいはまた、下田が和歌俳句漢詩を覚えたからといって、あるいは先生は源氏講義もされていますが、全学部全学科で源氏を教えるのか、という話にもなってくるわけですが、ただやはり下田が目指したものを、我々が現在にも活かして具現化したいものをど

これまでカリキュラムに落とし込んで、学外についても何を伝え残していくのか、というのはまだまだこれからで、それこそ研究としても行わなければいけません。

具体的にはかなりの努力はしております。たとえば、実際学生を連れて岩村に行くということもしております。カリキュラム改革をして「下田歌子に学ぶ」という授業をした年度から、希望者を参加させて、岩村の地で学び、現地に立ち現物を見ながら学祖下田歌子に学ぶという、そういった機会をなるべく増やすという取り組みです。下田の切り口が見えてくるような仕掛けを作って、そこではかなり具体的なこともあるわけです、生涯学ぶ力をなげ身につけていくべきかを下田から学ぶということです。そういうような、こちらがやはり確信的にやらなければならないだろうということとは、大事かと思います。

研究所ができたという大きな経緯には、やはり一つは女性の生き方のモデルとして、創立者に学んで欲しいところ、下田から学ぶ視点を具体的に提示することが大事だったということがあります。ただそれを最初全学に実施するという時に少し心配はありました。実践に來たから下田の話を聞かされてしまう……と受け身に捉えられるとすぐつらいことだと思っていましたが、意外と話してよかったと思っています。今の学生は昔とは違う面もありますが、やはり話せば素直に反応してくれる。あるいは、なぜ下

田はこうしたのだろう、といった疑問を持つ。やはりこれは授業として始めてよかったという感想を持ちました。

伊藤—— ありがとうございます。

今湯浅先生が強調された点は、学生に下田歌子の生き方を伝えるということだったと思いますが、それは下田歌子の特に良い面を伝える、つまり、やはり学祖を顕彰することだと思えます。が、学祖を研究するという時には、同時に、先ほど竹村先生のお話に国際円了学会を作られたということもありましたように、学祖の顕彰というだけではない面、問題点などが指摘されてくることも出てくるわけです。そういったいわば学術的な研究の進め方というものと、やはり学祖を顕彰したいという面もあるだろうというこのせめぎあいについて、竹村先生ご意見いかがでしょうか。

竹村—— 学祖研究にはまさに今、言われたような非常に大きな問題がありまして、特に本学の場合は学会組織を作ってしまいましたが、単に円了先生を顕彰するだけではない状況になってきています。やはり学会である以上、円了先生を客観的に研究する、客観的な資料に基づいてその実像を明らかにすると、これは欠かせないことだと思います。そうした時に、けつして光の部

分だけではなくて、やはり光と影はあるわけでした、殊に国家主義的なものが強い時代に生きたこともありしますので、戦争や植民地へのスタンスの問題とか、調べればいろいろと出てくると思っています。それを覆い隠すのではなく、それはそれとして、明るみに出すべきものは出しながら、しかし、それを乗り越えてやはり学祖として、教育理念や哲学思想というものに未来を先取りするような、あるいはどの時代にも不変の真理といつてもいいような大きなことを言われておりますので、それを取り出し時代に活かしていく。そして大学の発展に寄与すると。だいたいそのような考えで行っています。

円了先生教育理念なりその言葉なりを墨守するというのでは、やはり、今日あるいは未来には立ち行かないだろうと思います。先ほど片桐先生が成瀬仁蔵の言葉として紹介した「人として、女性として、国民として」というのも、今日のグローバル化した状況のなかでは、世界人としてという理解も必要ではないか、という意見もあるということでした。私も、たとえば円了先生の言葉の中には、自分を向上させて国家に尽くすべきだという言葉もありますが、それを今日の時代においてはやはり、公正で豊かな地球社会の実現に尽力すべきである、というように読み替えることも必要だと思っています。

資料に「東洋大学の名称について」と、円了先生の言葉を掲げ

## 東洋大学の名称について

「西洋各国に東洋学校の設けあり、また各大学に東洋学を専修する学科あることは余が帰朝の際すでにしばしば世間に報道せしところなれば、いまさら喋喋を要せざれども、我が邦においては東洋学中の泰斗たる支那の学も印度の学も古来自然に集まりおるにもかかわらず、今日なお一の東洋学校なくまたこれを計画する者すらあらざるは、余輩の深く怪しみかつ大いに遺憾とするところであります。従来我が邦にて西洋の学問を修むるには遠く欧米に遊学してその師を尋ぬるが如く、今後は西洋にて東洋の学問を志すものは遠く我が邦に來りて学を求むるにしたいと思ひます。」

(明治 29 年「新年のあいさつ」)

てあります。長いのですがここだけ紹介させていただきます。「西洋各国に東洋学校の設けあり、また各大学に東洋学を専修する学科あることは余が帰朝の際すでにしばしば世間に報道せしところなれば、いまさら喋喋を要せざれども、我が邦においては東洋学中の泰斗たる支那の学も印度の学も古来自然に集まりおるにもかかわらず、今日なお一の東洋学校なくまたこれを計画する者すら

あらざるは、余輩の深く怪しみかつ大いに遺憾とするところであります。従来我が邦にて西洋の学問を修むるには遠く欧米に遊学してその師を尋ねるが如く、今後は西洋にて東洋の学問を志すものは遠く我が邦に來りて学を求むるにしたいと思ひます。」と、東洋の学問を修める者はぜひ本學に來て勉強してほしいと。これが本學の名稱の由來となるだろうと思うのですが、今日では本學は四つのキャンパスに十一学部、文系・理系・文理融合さまざまな學問分野があります。そういう総合大學に發展したのですから、どの分野でも各國から學びに來るようなそういう大學を創るということで、創立者の意志を發展させる、あるいは読み替えていく。そうした中で、學祖の建學の理念や精神を活かしていくことが大切かなと思つております。

伊藤——ありがとうございます。

それでは勢力先生にも今の点について伺いたいのですが、日本大學はまさに日本という語を學校名に冠しているように、日本の法律というものを考えよう、あるいは國學的觀點も含めて日本をあらためて見直そうという考えで、山田顯義のもと——彼は國學院の創立者でもあるわけですが——、創られた。そうしたことも含めて、先ほど「國體」という言葉についての言及もありましたが、「日本」というものを重視するという考えなどについて、学

内で學祖の考え方についての何かまとまつた理解のようなものはあるのでしょうか。

勢力—— たしかに日本大學は名前に「日本」という名前を冠しています。そして、そのことを多くの學生がかなり意識しています。私は授業で、シンボルやアレゴリーといったものについて學生たちに話すとき、日本大學のロゴマークを新たにデザインしてみようといった課題を与えたりするのですが、すると、かなりの學生が「日本」ということをすごく意識したデザインを考えます。日本大學ということで、「日本」ということを考えること、少なくとも意識することを使命と感じている學生が多いのかもしれない。

今のご質問のかぎりで言いますと、先ほどの竹村先生のお話から少し思いついたのですが、言葉というものが、「學祖」という言葉もそうですが、ある種の磁場を持つてしまふ。「國體」なら「國體」、「國の本」というものをやはりどこかで意識していないと、外國のものを右から左に持つてきても、じゃあ日本語でそれをどのように受容し運用するのか、やはりそこにはどこかで日本語という一つの壁があつたりするので、そういう時にどう考えるか。「國體」なら「國體」というようなある種の磁場のもとに、あるイデオロギーができてしまつて、いつのまにかそのイデオ



ロギーに縛られるというようなことが、たとえばこの前の戦争の時にはあつたんだらうと思います。山田顕義にしても、その磁場の中にいる、あるいはその磁場を作る一端を、もしかしたら担つたのかもしれない。今日の発表の中では、まったくそうでない、むしろ実証的な検証とか、神格化した言論というものを前提しないような国のかたちの研究方法を山田が重視した点を強調しました。ただし、ある種の言葉が、そのような方法すらも飲み込んでしまうような磁場を生み、その磁場に人々がからめとられるということは確かにある。そうした言葉——たとえば「日本」とか「国体」とか——が生む磁場のようなものの力に対する感受性みたいなものは、やはりしっかりとふまえていく必要があるだろうと思うのです。それは実は学祖研究も同じで、学祖の言つたことから理念を抽出するという、そこから得るものもたくさんあるわけですが、それによつて学祖や学祖の言葉を神格化してしまうと、またそれはそれで息苦しいわけです。

ご質問は、日本大学は「日本」というものを背負つたことによつて、まあいろいろなことが過去あつたと、そういう総括や反省もふまえて学内の統一見解があるか、ということですが、統一見解というのは、私にはまだ十分には理解できておりません。先ほどの研修でもいろいろな学祖の資料を見えますが、その解

は、日大の歴史についての研修でした。これも国の動きともからんでさまざまなありました。先ほどの「日本大学の目的および使命」改正の時に、「日本精神」とか「道統」という言葉をどう解釈するかによつて起きたこと、あるいは全共闘の話とどう絡んでいたのか、ということなども研修の資料にはあります。そのような話が今少しずつ出てきているところです。ただそれを、学校として総括することになると、当たり障りのない話になつてしまう可能性もあります。

言葉の変遷にしても大学の歩みにしても、歴史を立ち止まつて振り返つて総括するというのは大事ですが、その時にあまり無理にまとめあげない、あるいは一つのイデオロギーや、ストーリーにまとめたりしすぎない方向というのも必要かと思っています。

学祖の話を学生にするにしても、こちら側の話を教え込もうとしても、それで喜ぶ人もいるでしょうが、それはやはり「自主創造」という理念とはちよつと違うと思います。そういう意味で、一人ひとりの教員や学生がそういったちよつと振り返つてみるということとそれ自体を楽しめる、というような環境が必要ではないかと思っています。

伊藤——ありがとうございます。先ほどの勢力先生のご発表は、その研修での資料がすごく面白かったというところからまず

お話しされて、その研修内容についての刺激的な一つのご理解を示してくださいんですが、日大としてはその資料をどういうふう<sup>に</sup>に理解してもらうか、というところまでは踏み込んでいないということでしょうか。細かいところは、先生方のご理解に任されているということなんでしょうか。

勢力—— 今日ご登壇されている他の先生方と違って、私の場合は理工学部の一教員という立場で、大学全体としてのどのようなことがオーソライズされるのか、というところまでは正直見えていないというところがたくさんあります。ただ、理工学部にかぎらず、大学が個性化していかなければならないという文科省の話も先ほどありましたが、「自主創造」を全学共通科目にするという話で現在カリキュラム作りが進んでいるところです。そうなってくると、計画段階で、教員から、こんなものが「自主創造」と言えるのかというような反発ももちろんあがってきます。そういうものも吸い取りながら、大学として、学祖というものを、これから未発掘の書簡などの資料を発掘しながら、理解を深めていくんだらうと思います。

ちなみに、先ほどした私の話ですが、研修では、大学史を研究されている先生方の前で一応お話ししました。面白いとは言っていただけでしたが、素晴らしいというコメントではありません

でした。要するに、学祖の言葉の解釈にどこまで踏み込んで考えていくのが「素晴らしい」といえるのかという問題が残ります。この問題は学祖研究では避けて通れないところですが、それを学校としてどこまでコントロールするのか、あるいは教員と学生の自由にどこまでゆだねるのかという点が、やはり非常に重要な課題かなと思います。

伊藤—— ありがとうございます。

それでは片桐先生に伺いたのですが、片桐先生主宰の研究会は「成瀬仁蔵とその時代研究会」というお名前をつけられていて、「成時<sup>なりとき</sup>研究会」と略されているとのことですが、そういうふう<sup>に</sup>に成瀬仁蔵だけでなく、「その時代研究会」と名付けられた理由と、実際にそこでのようなことをなされているのかとは、おそらく今の話とも関わってくるのかと思いますので、そのあたりを伺えますでしょうか。

片桐—— 私は、顕彰と研究は矛盾しない、と思っています。研究をふまえた顕彰でなければならぬので、根拠のない顕彰はやはりまずいと思います。その顕彰するものとなっている研究というものがなければ、具合が悪いだろうと思っています。さらに言えば、研究は検証に基づいて行われるわけで、そういうものがない



く、勝手に、成瀬はこういうような人物であった、というような「物語」を、空想なり幻想なりで作るわけにはいかない。そういう意味では研究がきちんとなされた上で、顕彰がなされるべきだと思います。

ただ日本女子大学においても、実は、成瀬仁蔵著作集が一九七四年から一九八〇年にかけて作られたんですけども、その当時のことをご存知の、あるいは一生懸命それを推進された方にお聞きしますと、そんなものは必要ない、というのが学内のほとんどの声だったというんですね。それは一つには、崇拜者の側から、あの成瀬仁蔵先生は研究の対象ではない、尊敬の対象ではあるが研究の対象ではない、あの偉大な先生を研究するとは何ごとか、という声が上がった。で、反対側からは、あんなつまらない人間になぜ大学の金を使うんだ、ということでは反対された、と。しかし先ほども言いましたように、この著作集は非常にきちんとした私たちで、書簡や雑誌に書いたものも含めて、集められた膨大な資料を活字化したもので、これが成瀬研究の基礎として非常に重要な役割を果たしていると言えます。したがって、いわば根拠のない崇拜、顕彰とも違うだろうと思います。その意味で、私は先ほど竹村先生がおっしゃられたことで羨ましいと思うのは、学会で作られたということです。いろいろな問題点も指摘されたり、あるいは影の部分明らかにするような研究もあるかもしれないが、

やはりそれは事実として検証されるべきものであるならば、しっかり明らかにするべきで、それは成瀬にとつても同じことだろうと思います。

先ほど、同窓組織桜楓会に「成瀬仁蔵研究会」があると申しましたが、その研究会は、以前は「成瀬先生研究会」でした。しかし「先生」を研究するというのはおかしいだろう、研究する前からすでに顕彰しているじゃないか、ということで、「先生」を取りました。私も学外で話すときほとんどの場合、「成瀬」とか「成瀬仁蔵」とか「先生」を使わないで、敬称を略して話しています。成瀬仁蔵は、たとえば「自学自動主義の教育」ということを言うんですが、これを高等教育の中で言うのは非常に珍しい。私は教育史が専門ですが、初等教育では、「自学自動」、自ら動く教育というのが大事だ、というのは、大正時代に「新教育」というかたちでよく言われています。けれど、大学の高等教育の中で、「自学自動の教育」と成瀬仁蔵は言っている。それこそ今時は、「アクティブ・ラーニング」などと言われている、それと同じようなものとして理解することができないのではないか、というかたちで、今まであまり強調されなかった、あるいは知られていたが、あまりその意味を現代的なところに重点を置いて理解していなかった部分を、きちんと検証・研究にもとづいて、実際の文献をふまえて語っていくことが必要だと思います。

ただ、学生は、大学に入ってくると、「成瀬先生、成瀬先生」とみんな言っているけど、何だろうそれは、と不思議に思うわけです。高校の教科書にも出てこない。福澤諭吉や新島襄は聞いたことあるけど、そんな有名じゃない人を、この大学はたいそうな人のようにありがたがっている、というようなイメージを持つ学生もいるようです。

「成瀬仁蔵とその時代研究会」では、なるべく卒業生でない方たちにも参加していただき、尊敬・崇拜の対象である必要のない、借りのないニュートラルな成瀬研究をしていければ、と思っています。そして、学内だけで知られていて、外では誰も知らない、というような現状を少しでも打破していきたい。そのためには、成瀬仁蔵を個人としてよりも、その時代の中に置いて研究するというのが非常に重要だろうと考えます。「成瀬仁蔵とその時代研究会」という名称には、そのような思いが込められています。それからもう一つ、現代にも通用する成瀬の言説、これを引っ張り出してきて百年以上前にこんなことを言っていたという点を強調するのはもちろん大事だけれど、やはり時代が違うという点は非常に重要なことだと考えています。たとえば先ほどの「国民として」を、すぐ「市民として」や「国際人として」に読み替えようとか、単純にしてしまうことには、私は反対ですね。「婦人として」を「女性として」と言うのは、まあいいのですが。やは

り、成瀬仁蔵にとつて国家は重要であつた。今だつてそうなんじゃないですか。だからPPPはこんなに問題になるわけでしょう。国家の境目を取つ払っているのかという、そういう問題をあらためて我々は突きつけられているわけです。世界人とか国際人とか、簡単に言えない時代に私たちは今現にいるわけです。このように言う時には、国民としての中身は何かということを問う必要があるけれども、それはともかくとしても、成瀬は日本国家のためということを重要視していたわけで、その思いと今の我々の思いとは異なるかもしれないが、しかしその根本的なエネルギーなり志向なりは、これはやはり受け継ぐべきものだろうと思います。そういうことも含めて学祖研究はなされるべきで、限界を見つけるのはある意味で簡単ですが、けれどそれを簡単に読み替えようとする安直さも不要だと思います。簡単に顕彰したり否定したりすべきではなく、やはり十分吟味して、本当にそういう言葉を語つた彼はいついた何だったのかということを、まさに研究すべきなのだ、そう思います。

もう一つ、お話しついでに天皇制の問題についてですが、成瀬仁蔵はものすごく明治天皇を尊敬していました。天皇制についても、彼はアメリカで教育を受けているので、「日本精神」とか「日本固有の文化」だとか、「惟神の道」とか、そういうことは言いませんでした。しかし、明治天皇のことは非常に尊敬していた。

彼は一九一二(明治四十五年)年、明治天皇が亡くなる年に、ヨーロッパ視察旅行に行くため横浜まで行つたけれど、天皇危篤と聞いて急きょ出発を取りやめて、日本女子大学に戻つた。そしてそのすぐ後に天皇が亡くなりますが、その追悼式を大学でやつてから渡欧しました。それぐらい尊敬していた。だからといって、天皇制というものにどっぷりはまつていたかという点、それは別です。だから、明治天皇を尊敬していたからだめなんだとか言うのは単純すぎると、私は思います。現代的視点を持った研究をして、顕彰できるものは顕彰するということが重要ではないでしょうか。

伊藤—— ありがとうございます。

今片桐先生がおつしやつた問題というのは、おそらくこの四大学とこの学祖にも共通する、時代の持つている問題ということになつてくると思うのですが、どうでしょうか、この点について何かご意見のある先生いらつしやいますでしょうか。

湯浅—— 意見ではないのですが、片桐先生のおつしやられたことは、本学にも重なるなと思います。下田歌子も、ご存知かと思いますが、林真理子さんの書いたような側面があります。「平民新聞」をそのままスキャンダラスに書いていますが、学園は別にそれを隠してはいませんが、ただそれはまったく証拠のないこと

なので、どうにも検証しようがないことなのですが。ただやはり、皇室にすぐ近い方でした。そういうことで、戦争との関係とか、それからやはり「賢母良妻」の問題などがあります。特に学内で、下田歌子の著作を教員によつてはかなり読んでいるかもしれませんが、ほとんどの先生方は読まないの、ただ名前だけで「賢母良妻」つてもう古いんじゃないのと、ちよつと右つぽいんじゃないのとか、あまり積極的に評価しない、なんとなく教員でもそういうところがあります。たとえば、「賢母良妻」などは本当にそれで、これは伊藤さんが論文でその時代の「賢母良妻」の意味を検証していると思いますが、そういうことがきちんと検証されていかなないと、やつぱり今後につながつていけません。そういうことをふまえて学生に伝えていかなければならないと思います。そういうところも片桐先生のおつしやられたことと共通するなと思います。

それから最後に一つだけ、下田歌子学会はちよつと難しいかなと思います。この下田歌子研究所のニューズレターもそうです。年三回出しているのは、速報性を重視するからです。それから年報は年一回で、まだ去年のもの一冊のみですが、これも内輪の人間だけが書いているわけではありませんで、かなり広くいろいろな情報や論を集めています。場合によっては、下田についての検証も、我々の思わぬマイナスの見方もあるかもしれない。拒否す

るどころか喜んで、殊に年報では取り上げていきたいと、そういう研究の場にしたいたいと思っています。事実であるならば、マイナスでもプラスでも我々は受け止めていかなければいけないし、それは隠すつもりはないですし、学問として客観的な研究をしなから、その現代に活かせるものを内外に発信していかなければならないと感じています。

伊藤—— ありがとうございます。それでは、もうすでにいくつかの論点が重なってきいているんですけども、学内での学祖評価を統一すべきかどうかという問題について、先ほどの崇拜者と嫌悪者との問題とも関わってくるのですが、あらためて伺いたいと思います。私が先日、それこそカリスマ的な創立者を持つ、ある私立大学で伺ったことなのですが、その創立者の書いた文章を後で著作集のようなかたちにした時に、編纂した方が勝手に書き換えてしまったところがあるというんですね。それはなぜかというと、あの先生は素晴らしい先生なんだけれど、どうもこの古典のこここのところの理解には、明らかな間違いがある、と。でもあの素晴らしい先生がこんな間違いをするはずがないから、これは本当はこういうふうなはずだということで、書き換えてしまおう、と。そういうこともあるというような話を伺いました。

そういうかたちで、いわば神格化ということなんでしょうが、

学祖を自分の思うようなかたちにしていきたいという人たちがいる。それによって学祖の評価をより高いものにしたいたいという思いからなのでしょうが、しかしそういうようなことがあればあるほど、逆に反発する層というのも当然出てくるわけでして、もちろん、「特に何も思わない」という態度の無関心層もいるかと思いますが、そういういろいろな考え方の人たちを、はたしてまとめていくべきなのか、どうなのかということについて、竹村先生は実際にリーダーとしてやっていらつしやって、もし何か今までのご経験でありましたら、伺えますでしょうか。

竹村—— 建学の精神というものを定めるときには、なんらか普遍的に理解されうるようなものにせざるを得ないだろうと思います。実は、現在は「諸学の基礎は哲学にあり」と「知徳兼全」「独立自活」という言葉を掲げているんですが、少し前は「護国愛理」という言葉も非常に重視していました。これについては、「護国」だから右翼だとか、特定の政治的立場に偏っているのだとか、そういうことではなくて、片桐先生も言われたように、もつと深いいろいろな時代の中での意義があることであつて、けつして否定されるべきことではないと私も思っていますけれども、いろいろと誤解を招くというようなこともあつて、現在では掲げることとは避けているという実情はあります。

しかしこの「護国愛理」というのも、このグローバル化した時代にこそ、むしろ自国の文化、思想、学問、芸術、そうしたものを深く理解して、そしてそれを人々に伝えていくということも課題になるわけですし、またけつして「護国」だけであるわけではなくて、「愛理」という、あくまでも普遍的、客観的な真理を探究していくもう一面をも持ち合わせているわけですし、これはむしろ、現代のグローバル化した社会の中で必要なことではないかと思っています。ですが、さまざまな判断があつて、明示的に掲げるということはおしえておりません。そういうふうに、本学の研究活動の一番根本になる立場を明らかにするという時には、ある程度は普遍的にせざるをえないだろうと思います。

しかし、円了のさまざまな面をいろいろと研究し明らかにしていく、これはもつと自由になされていいことだと思っています。円了学会を作っていて羨ましいというご意見を伺つて思つたのですが、この学会は現在、会員の自発的な会費で成り立っているのではなくて、あくまでも本学が運営しているかたちなんです。なので多少の制約や限界があるんじゃないかと思いますが、しかしそこでは自由な研究をしようともしているわけです。ですから、極端な神格化を目指すことは、やはり避けられるべきだろうと思います。

幸いなことに、井上円了という人は非常に庶民的で、大隈重信

や福澤諭吉は士族出身ですが、円了はお寺の出ということで平民でしたので、全国巡業したときも絶対に三等車にしか乗らないとか、ご飯は握り飯で、服装もいい服を着ているわけがなく、それから自分の学問は「田学」なのだと謙遜したりと、非常に庶民的でした。そういうものが円了像としてある程度明らかにされていて、本学の場合は、崇拜の対象というよりは敬愛の対象となっていて、そういう意味では神格化されるべきかという話題にはほとんどなっていないし、問題になっていない状況であると言えます。

伊藤——ありがとうございます。

今のお話というのは、学祖の評価というものにかぎらず、自校教育というものをどう展開していくかということにも関わってくるかと思います。自校教育というと、学内の学生さんたちに自分たちの学校のこと、学祖のことを知ってもらうという教育ですが、これにはやはり学内でのカリキュラムをきちんと構築するための全体のコンセンサス、協力が必要になってきます。そういう時に、どのような注意や配慮というのが必要なのか。あるいは実際にやってみて、どういった反応があるか、というようなことを伺つていきたいんですが、湯浅先生、いかがでしょうか。

湯浅——これについては先ほどの資料の最初にお見せしたものに盛り込んだつもりなのですが、二〇〇八年から学長になって、そこから二年間の準備期間というのは、まさに教授会で検討してもらったための時間でした。私はアウトラインを示しましたが、委員会の先生方に詰めていただいて、それを経て教授会でこういうかたちにしようという決めてもらったものです。もちろん学長は権限がありますから、ある程度はできるでしょうが、長くこれが続いていかなければならないとなると、見直しをしていかなければならない。それには先生方みずから選んで、関わってくださらないといけませんし、学生の教育の最前線にいる先生方が、それを行いと思ってくださいらないと意味がありません。教授会は多数決を取りますから、一定数の反対はありますが、きちんとしかるべく可決するのであれば、反対の先生も納得できるわけです。

その上でじゃあ始めようというかたちになって始めたのが、この自校教育を含む初年次教育の見直しでした。これは、この頃ちょうど全国の「自校教育学会」というのができた、まさにそういう時期だったので、本学は後れてはいなかったと思います。もちろん同志社のようにずっとそれをやっていたしやる所もあると思いますけれど、本学には下田歌子という創立者がいて、これは自校教育には後れずにやりたいと。今またこれも見直しの時期で、先生方には知恵を絞っていただいています、あるいは理事会で

建学の理念をもう一度確認されているというように伺っています。かつては「品格高雅」「自立自営」の女子教育と言っていましたし、それは今でも消えてはいません。あるいは下田の言葉として、女性について「清らかな徳性と豊かな情操とをもって社会の弊を正す」も残されています。それから先ほどの「女性が社会を変える、世界を変える」という言葉も、常に自校教育のなかで見直していかなければならないのですが、カリキュラムの隅々までそういう教育理念が染み渡るかどうか、これはすぐできることではないし、常に努力して、少しずつ進めて、また見直していくということがずっと続いていくのだろうと思います。

伊藤——ありがとうございます。

勢力先生、日本大学のような大きな大学で、こういった自校教育というものをするというときに、それぞれの学部が独立性の高い大学なわけですが、どのようなことが行われているのか少し伺いたいのですが。

勢力——はい。日大はまさにこういった、学祖の理念というものを掘り起こそう、今の教育に活かそうというような流れが始まっている最中でして、今年度先行実施している日大法学部に見学に行きました。日大法学部は教科書も作っていて、シラバスも



決まっているけれど、中身はほとんど先生にあずけられている、という授業が「自主創造」という授業で、これが前後期一コマずつあるということで、面白いなあと思いました。ただ、他の学部だとこうはいかないかもしれません。というのも、マニユアル化されたものをきちつとやりたい先生もいれば、アクティブ・ラーニングというものの解釈もまちまちで、教員は何も手を出さずに、学生が何かをすればいいんだと、そういう考えの先生もいらつしやるにちがいないからです。

ですから、「自主創造」という看板の授業は、試行錯誤が続くでしょうが、少なくともこの看板自体は面白く、この看板が、授業の内容や方法をおのずと試行錯誤させるように思います。私個人として考えている方向としては、学祖の言葉からある種の理念を考えていくための材料を取り出すというところまでは全学共通で、じゃあその理念とは何なんだろう、その理念に迫るために大衆ができることは何なんだろう、などと考えていくところは、教員が教え込むとか、これだけやらせればいいとかではなくて、まさに「あなたとともに」という目線で、介入しすぎず放置するのでもなく、教員も一緒になって、その理念のかたちみたいなものを考えていく。それは必然的に学祖の時代にどうであつたかを考えざるをえないので、たとえば山田の時代だったら近代化とは何なのかとか、志を立てるとはどういうことなのかとか、国民とか

市民とか社会とか責任という言葉をどう考えればいいのかとか、山田の時代はこうだけれど、私たちの時代はどうなのだろうかとか、やはり他の時代を考えながら、自分たち自身のことを照らす鏡になってくれると思うんです。これはもう試行錯誤せざるをえないわけですが、その試行錯誤がいろいろな豊かなものを生むんだろなと思っています。

伊藤—— ありがとうございます。

今の自校教育について片桐先生にご質問がきていまして、これは書いてくださったのはおそらく日本女子大学の学生さんだと思うんですが、「昔の成瀬の時代の写真展示などを見ると、軽井沢での一泊二日のセミナーで、学生たちが成瀬の講義を実際に聴いたり、軽井沢の自然を楽しんだり、あるいはタゴールを呼んで講義を聴いたり、非常に意義深いことが行われていた。けれども今はそういうものが行われていても形骸化しているんじゃないか。今、日本女子大学の学生として、学生たちの中で成瀬のことで盛り上がりつつある雰囲気あまり感じられない。これだけ大学側がやっているのにもかかわらず、学生側にはいまいち通じていない現状に対して、どうしたらいいのか」というご質問をいただいております。片桐先生の方からお答えがあれば、よろしくお願いいたします。

片桐—— 痛いところをついた、よく勉強している学生ですね。今軽井沢のことが言われましたが、私の資料の略年譜で、一九〇六年の広岡浅子のところに、軽井沢三泉寮名誉寮監と書いてあります。三泉寮は広岡浅子の尽力で三井家が別荘を提供したもので、したがってその仲介役をしてくれた広岡浅子は名誉寮監ということになるわけです。今でも三泉寮という名前前で続いております。現在は一年生全員が一泊二日で夏休みに、教養特別講義という授業として軽井沢で行っています。戦前は、当時の最高学年生が、卒業する年に、軽井沢にだいたい二週間から三週間滞在したんですが、当時は軽井沢に夏に行く——特に若い女性が行くというのが非常に困難だった時代に、そういうことをやっております。これを戦後しばらくの間は二泊三日でやっていたんですが、それが一泊二日になったんですね。これが今のご質問のポイントとなるわけですが、教員学生ともに大変だ、ということで一泊になったわけです。夏休みに二十人ぐらいずつに分けて、全員行くわけですから。

たしかにご指摘があったように、なかなかその意義を、つまり軽井沢というのは日本女子大学にとってこういうところなんだということを、きちんと語れる教員が少なくなっている。卒業生の教員は多くないですし、卒業生でない教員はあまりそういうこと

を理解していない。したがってまずは、教員たちがそれを理解することが必要なのですが、それが十分ではない。自校教育の専門家の先生がいてその人に講義してもらうんじゃないかと、できればすべての教員が自校の歴史と伝統について、創立者について知ることが必要なのかもしれませんが、それはまだ不十分です。

私が学部長だった頃から、新たに赴任した先生方に、四月一日の発令日に集まっていただいて大学の説明などをする時に、成瀬記念館を見ていただいたり、本学がどういう大学であるかということについての話をするということはしています。が、別にその後試験をやるわけじゃないし、単位を出すわけじゃないので、どのくらいそういうことを理解してくださっているかはわかりませんが、そういう努力はしています。が、今指摘されたように、形骸化しているというご指摘は、重く受け止めるべきことだろうと思います。

ただ、先ほど申しましたが、私が赴任した時は、「成瀬、成瀬」という話は聞いたけれども、やはりそれはあくまで一部の人だったように思うんですが、大学改革の中で、建学者の理念をきちんとふまえるべきだというような声がかかるにしたがって、少しずつ職員や教員の中に浸透し、かつ学生のなかにも浸透していくだろうという期待を持っております。

それともう一つは、付属の幼稚園、小学校、中学校、高校があ

りますが、やはり付属の幼稚園、小学校、中学校くらいまでは、成瀬や日本女子大学に関することが授業の中にしつかり組み込まれて、非常によく勉強しているの、付属から来た学生はそのことをよく理解しています。しかし他方、かえって食傷気味になって、大学に入ったらもうその話は聞きたくない、というようなことを率直に言う学生たちもいます。そういう意味から言っても、やはり現代の学生にも興味を持ってもらえるような、現代的視点を持った創立者像というのを発見して語るべきだと思います。人格化なんてとんでもない、そんなものはすぐに化けの皮がはがれるので、そんなことをやったってほとんどナンセンスだと思います。学生が理解して、「うん、なるほど、その人は私たちが尊敬するに足るんだ」と多くの学生に思ってもらえるような人物像を示すべきだし、またそれを示せる対象であると、少なくとも私は成瀬仁蔵に関して思っているし、大学としても思っております。

学生の中に、あるいは卒業生の中に、どうしたら浸透していくだろうかということについては、学生の意見も聞いたりして、なるべくビジュアルなものを使ったり、いろんなことをしてはいるけれども、やはり方法よりも内容ですよね。この人の創った大学に学び、卒業したということに誇りを持てるようにならないと、いくら百年前は偉かったといつても、やはりそれはそれだけのこと、ということだと思います。

伊藤——ありがとうございます。

では竹村先生にお願いしたいのですが、これだけ井上円了を押し出して自校教育をやっていらして、その学生さんへの浸透ということでの成果を、少し伺えればと思います。

竹村—— 本学は、二〇一二年の創立百二十五周年に大きな行事をしました。この二〇一二年に新しいカリキュラムを用意した時に、自校教育が入ったということになります。これは教養教育——本学では基盤教育と言っておりますが——、その中の「哲学思想」という枠組みの中に置かれたのですが、必修にはしてありません。その時に、法学部は独自の考えで必修にしました。二単位ですが、法学部所属の哲学の先生が担当してくださっています。その先生からは、授業の一環として哲学堂に実修に行くという学生は非常に感銘を受ける、ということ聞いております。また必修にしておりますので、全学生からすれば割合としてはそんなに多くはございませんが、基盤教育の中の「井上円了と東洋大学」という講義を受けた学生は、創立者はこんなに偉い人だったのかと認識して、非常に感動するという者が大半であると聞いております。浸透という意味では、けっして広くはないですが、その授業を受けた学生は、それぞれあらためて東洋大学の意義や、ここで

学ぶことの意義を考えると、あるいは大学に誇りを持つとか、そういった効果は出ているようであります。

これを必修にすると、教室も相当用意しなければならないし、先生も用意しなければならないということで、物理的にちょっと難しいかなというのが現状です。一学年が全学でおよそ七千人いますので、それは無理かと思つていますが、全キャンパスに二単位分ずつ用意はしており、そしてそれなりの効果は上げているところであります。

内容については、特に大学として決めているということではなくて、井上円了を長年研究してきた先生に任せていて、チェックはしております。それとは別に、十五冊のブックレットを作つてありますので、やろうと思えば誰でもどこでも、一セメスターの全時間でそれを活用するということができるようになっております。そのブックレットの内容も、特にチェックしたというようなことはないのですが、今後はそうした内容も含めて、井上円了研究センターなどで多少検証してみ、問題点があればそれは改善するという必要かと思つています。

伊藤——ありがとうございます。

それでは最後に先生方に、最初に私が問題点として出しました、今後の私立大学がいかにあるべきなのか、——創設時には官学

とは異なる教育ということで、それぞれの独自性、それぞれの志を持つて始まった私立大学というものをあらためて見直そうというのが現在の動きなわけですけれども、そのことも含め、これから私立大学はどういうことを考えていくべきかという点について、今日のまとめという意味でも、あるいはご感想でも結構ですが、コメントをお願いできればと思います。では、湯浅先生からお願ひいたします。

湯浅——このように「学祖研究の現在」ということで、四つの大学がそれぞれお話しただけの機会はなかなかなかったと思います。本当にありがとうございます。いわゆる私立大学というのは、個性的な創立者がいて、建学の理念を誇りに思つて教育している機関ですので、ただそれは我々側のことだけではないけなくて、カリキュラムとして、学生にちゃんと伝わつていくように、いろいろなかたちで試行錯誤していかなければと思います。かなり抽象的な生き方にしても、スキルにしても、それが学生に届いているということが確認できる、学生にとつてもそれが見えているということを目指していきたいと、一教員としては思います。

勢力——実は私自身は国立大学出身ですので、就職して初めて、ああ私立大学というのはこういうところか、と感じた点が多

くありました。やはりそれぞれ自分の大学に誇りを持っていて、どんな出身者がいるとか、そういうことにすぐ関心があるんですよね。

学祖を一つの題材にして、自分たちの大学のアイデンティティーを考えるとというのは、意義のあることだと思います。歴史的・文化的に継承発展してきた各大学における教育や学問のあり方を、立ち止まって検証しつつ発展させていく、いわば大きな意味での教養教育の中の一つなんだろうと思います。学祖という、実際にさまざまな巨大な問いと向きあつて、その問いと必死に格闘した人たちの足跡を自分たちで見ても、そこから何か考えるヒントを得られるんじゃないか、と。教養教育の一つのあり方として、特に今日初めて、他の私立大学でも非常に熱心にそのあたりの掘り起こしをいい方向に活用するように進められていると伺いましたので、他大学のこともこれを機にいろいろと学んで、自分の大学に活かしたいと思います。

竹村—— 今日参加させていただいて、他大学の学祖の先生方、下田歌子先生、山田顕義先生、成瀬仁蔵先生、それぞれ本当に素晴らしい方だと感銘を受けました。また勉強になって、感謝しております。

私学としては、やはり創立者の建学の精神をどこまでも大事に

すること、これが一番大事なことだと思っております。このことを根本に据えておかねばならないだろうと思っております。と同時に、大学の今日の社会的使命として、教育・研究・社会貢献と言われますが、やはりなんといつても学生にこの二十一世紀の、いわばボーダーレス化した社会、このグローバルな社会を十分に生き抜いていけるだけの力をつけさせること、そこに現在の大学の根本的な使命があるというように私としては考えています。どこの大学でも言っておりますが、グローバル人材の育成ということとは、本当に真剣に考えなければいけない課題だと思います。そのことと、明治の時代に生きた学祖の思いというものをどのようにつなげていくか、これを今、腐心しているところなのですが、意外と明治の時代というのは結構インターナショナルであったりグローバルであったりして、それがその後の国家主義的な傾向で閉じられていくというようなこともあったように思います。そういう意味で、むしろ今、学祖の精神が活かされるというような状況もあるのではないかと思っております。そういうかたちで建学の精神を時代に活かすということを、さらに進めていきたいと思っております。

片桐—— 私立大学として、ということをおっしゃられましたけれど、大学の規模とか、あるいは創立者といつても、個人として

イメージがくつきりしている創立者と、集団で創られたりという  
ようなところなど、大学によっていろんな条件があると思うんで  
すね。したがってあまり一般論として言えないんですが、少なく  
とも日本女子大学に関して言えば、そんなに大きいとも言えない  
規模の大学の中で、やはり成瀬仁蔵が考えたことを教育の理念・  
方法として活かせると思ってるんです。

じゃあそれが何なのかというと、また話が長くなってしまいま  
すが、単に理念だけではなく、成瀬仁蔵が考えた教育方法を含め  
て、現代に活かしていくということです。成瀬仁蔵は、帝国大学  
をはじめとするいわゆる高等教育では誰も考えなかった授業のス  
タイルを一九一〇年頃、いろいろ考えました。授業の選択制とい  
うのを取り入れたし、いろんなかたちでの実習実験というのも取  
り入れて、まさに「自学自動の教育」を日本女子大学でやろうと  
したわけです。それは今日の教育においても非常に求められてい  
るものなので、私に言わせると、百年経つてようやく時代が追い  
ついた、という気がするんですが……。そういうやり方を、あら  
ためて今日の時代に合ったかたちで活かしていく努力をすること  
が、私立大学にとっては重要なことだと思います。これは国立大  
学にはできないことであるし、私立大学だからこそできることで  
あるとするならば、それを活かさない手はないだろう、と。そう  
いう財産を大いに活用して、特色のある良い大学教育をやってい

くべきだろうというふうに思っております。

伊藤—— ありがとうございます。

本日は登壇いただいた先生方、長時間ありがとうございました。  
またおつきあいいただきました会場のみなさまにも御礼申し上げます。  
本日はまことにありがとうございます。

